

魔法の靴

理都立雪谷高校 1 年の増田愛理

遠い国の誰かとつながる私の装具

つながっている、世界と私。

私にとって、今、自分自身と世界をつなげている架け橋のようなものはなんだろうかと考えた。産まれてきてから一度も外国へ行ったこともない。日本人以外の外国の友人もない。十五年間、家族に守られながら小さな世界で生きてきた私にとって、それはあまりにも大きな課題のように感じた。

しばらく考えたとき、ふと、これだ、私にも世界とつながっていることがあったと気がついた。それは装具だ。私は生まれつき下半身麻痺（まひ）の障害者で、長下肢装具をつけて歩いている。装具をつけなければ歩けないけれど、装具をつければ歩くことが可能になる。私にとって装具とは、履いた瞬間に願いが叶（かな）う魔法の靴のような大事なものだ。

しかし、成長と共にサイズが合わなくなり、約一年に一度、新しい装具を作る。一年間に一足なので何度も何度も修理しながら履き続ける。ボロボロになった装具も、私にとっては宝物だ。捨てるなんてことは絶対に無いし、母にとっても私にとってもあり得ない話だ。

私がまだ幼い頃、使えなくなった装具について母が、義肢装具士の先生に、「他の皆さんは、どうされていますか？」と尋ねた。すると、先生は、「大切に保管されている方もいますが、私どものほうへ返して頂き、たくさん集まった段階で当社からカンボジアへ送っています」と教えてくれた。それを聞いて、私も母も、サイズの合わなくなった装具でもまた誰かの力になれることを知って嬉しくなった。だから、それからは毎年、新しい装具が出来あがると、古い装具を先生にお渡ししている。

私は昨年、社会の夏の宿題でカンボジアのことを調べた。カンボジアでは、今現在も、未だ地雷などで足が不自由になる方がいる。たとえ足のサイズが合わなくても、支柱があるだけでも、上手に利用することができるそうだ。私が履いていた装具が、遠い国の会ったこともない知らない誰かの役に立つことができることがとても嬉しい。きっと、私を歩かせるという使命を果たした魔法の靴は、今度は私の知らない誰かの魔法の靴となって使命を果たしていくのだろう。

そう思うと、この装具を履いている間は、できる限り、大事に大切に履かなくてはならないと責任を感じる。だから次に使う人にたくさん幸せが届きますようにと思いながら使っている。

これが私にとっての“つながっている、世界と私”だ。装具が私と世界をつなげてくれる架け橋だ。今の日常生活で世界の誰かのために私がなにかできることは目に見えるものでは

ない。しかし、たとえ一年に一度しかそれができなくても、私にとってとても誇れることである。

装具をつけても歩けなくなった時がきたら、今度は車椅子を送るなどの活動ができると思う。私はそうやって、自分と同じ境遇で苦しんでいる人たちを生きている限り助けたい。いつまでも世界とつながってほしい。